

書評と紹介

鈴木貴字著

『〈サラリーマン〉の文化史

——あるいは「家族」と「安定」の近現代史』



評者：清水 剛

本書の目的は、しばしば「安定志向」や「凡庸さ」という価値観の象徴とされるような「サラリーマン」という表象（あるいは概念）について、なぜそのような価値観を内包するのに至ったのかを社会背景との関係を踏まえて明らかにすることである（18頁）。このために本書では、様々な文化表象、すなわち小説や詩のような文学作品から、漫画や雑誌記事、映画、広告、写真、流行歌の歌詞等を用いて、サラリーマンという存在がこれらの作品の中でどのように描写されてきたのか、どのような心情がそこに含まれているのかを検討していく。また、このような文化表象とそのような表象が生み出される社会的な背景との関係について、文学やメディア史のような研究だけでなく、経済史・経営史から社会心理学に至る浩瀚な先行研究を参照しながら検討している。端的に言えば、本書は「サラリーマン」という戦後日本社会を代表する、しかししばしば「ありふれた一般人」（本書カバー）としてみなされる存在について、そのような表象の形成過程や社会背景との関係

を様々な資料から明らかにした労作である。以下では、まず本書の内容を簡単に紹介したうえで、本書の貢献とさらに望む点について述べていこう。

まず「はじめに」において、「サラリーマンのおてもと集」という印象的な事例から説き起こす形で上に述べたような本書の目的が示された後、序章において『男はつらいよ』の寅さんのセリフに出てくる「大学出のサラリーマン」という言葉を踏まえて、人々の認識の中における「サラリーマン」、すなわち文化表象としてのサラリーマンを検討する意義と、その概念を家庭という文脈から検討する必要性が示される。そのうえで、本書の構成と「サラリーマン」に関する先行研究、そして文化史というアプローチについての説明とその必要性が示される。とりわけ、サラリーマンという言葉は学術的な定義が難しく、その理由はサラリーマンが「中流」という概念をア priori に含んでいること（28頁）、そのようなサラリーマンを分析するために表象を分析する必要があること（35頁）といった指摘からは、サラリーマンを統計的に分析するだけではサラリーマンを明らかにしたことにならない、という点が改めて理解される。

第1章では、いわゆる会社勤めのサラリーマンが一般的な存在として出現する前の明治から大正初期に焦点をあて、サラリーマンの原型とでもいうべき官吏等のホワイトカラー層の認識を二葉亭四迷の『浮雲』などの例を用いながら分析し、彼らが望んでいた「立身出世」は時代が下ると全ての人が望めるものではなくっていったこと、それゆえにホワイトカラー層の中に閉塞感を抱く人々が出てきたこと、またこの時

代のホワイトカラー層の中心的な価値観である「立身出世」は家庭という私的領域の充足と結びついていたことなどが指摘される。続く第2章ではサラリーマンという階層が一般化していく大正期、とりわけ第一次世界大戦前後の時期を対象として、当時の漫画家である北沢楽天が描くサラリーマンや岸田國士の『紙風船』等を使いながら、サラリーマンという階層が日本経済の発達とともに拡大する中で、彼ら自身が自らを労働者階級とは異なる中間階級として位置づけようとしていたこと、しかし一方でそのために労働者と連帯できず孤立していたこと、そのような状況の中でアイデンティティを保つために、住宅に象徴されるような「幸福な家庭」を持つこと、すなわち他人が羨むような生活を送ることを求めていることなどが指摘される。

第3章では大正末期から昭和初期を経て戦時に至る時期を取り上げ、堀辰雄の『水族館』や浅原六朗の『或る自殺階級者』等を参照しながら、この時期におけるモダニズムの普及やモダンボーイ・モダンガール（モボ・モガ）の位置づけ、そしてサラリーマンたちの閉塞感が論じられる。すなわち、サラリーマンは会社に依存した結果、軍国主義化の中で何ら行動を起こすことができなかつた受け身の存在であり、そこにサラリーマン自身が閉塞感を感じていた。一方で、モダニズムの担い手としてのサラリーマンは単にそのような閉塞感のために現実から逃避しようとするだけの存在ではなく、従来の家族規範等からの解放を意味する存在でもあったことが論じられる。さらに、補論的に戦時期のサラリーマンについても論じられ、その中では戦時体制の中で経営補助者としてのサラリーマンの役割が拡大したことや職員と工具の身分撤廃、あるいは女性労働者の進出などが戦後の日本社会に影響したことなどが指摘される。

第4章では戦後直後のサラリーマンについ

て、ゴードン・W・プランゲ文庫所蔵の写真やラジオドラマで人気を博した菊田一夫の『君の名は』、あるいは源氏鶏太の『三等重役』等を用いながらその認識や価値観を検討し、戦後において人々は戦争を忘却しようとするとともに、核家族につながる価値観を形成していったこと、また戦後の会社において自由恋愛が推し進められる一方で、そのような自由恋愛によって形成される家庭そのものが会社の発展に動員されていったことが論じられる。第5章では銀行員たちの労働運動やサークル活動に焦点をあて、銀行員の労働運動の中で作られた雑誌『ひろば』の内容の分析等を踏まえて、多くの女性が労働に参加しつつも、実際には男性に対して補助的な立場に押し込められていったこと等が示される。

そして、本書のクライマックスともいえるべき第6章では、山口瞳の『江分利満氏の優雅な生活』の分析を踏まえて、戦中派のサラリーマンたちが、モダニズムが戦争につながったことを恥ずかしく思い、またモダニズムにつながる意味での近代家庭、すなわち他人が羨む存在としての家庭が虚構であることを理解しつつも、戦争の記憶から遠ざかり、自らのいわばレズン・デートルとして家庭を守っていく姿を描きだしている。また、結論として「家庭」と「安定」は戦前においては他人が羨むものとしての「規格化された」（427頁）ものであり、戦後においてもそうであったものの、その「虚構性と人為性」（同頁）を自覚しながらもその中で生きていく「平凡な勤人」（432頁）となっていくことを指摘している。

以上述べてきたように、本書は「サラリーマン」というものがなぜ、どのようにして「平凡な勤人」の表象となっていたかを膨大な資料を使いながら明らかにしている。戦前においては「サラリーマン」とは決して平凡な存在では

なく、資本家と労働者（ブルーカラー労働者）の間で苦悩しながら、しかし会社を辞めることができずに閉塞感を感じていた存在であった。しかし一方で、労働者から見ればそれは羨望あるいは嫉妬の対象でもあり、良い生活を送っているように見える存在であった。「良い存在を送っているように見せる」ために実際には経済的に困窮することはあったが、少なくとも平凡な中間層ではなかったわけである。

ところが、戦後になり、サラリーマン達（ホワイトカラー労働者）とブルーカラー労働者が近づいていき、また会社も（ホワイトカラーとブルーカラー双方を含めた）労働者との共存関係を作り上げていく。そして、このような中でサラリーマンたちは「安定と平凡な家族生活」（17頁）を求め、それを作り上げていく。「ありふれた一般人」としてサラリーマンたちが形成されていく過程は決してありふれたものではなく、様々な苦悩と欲望の中で作られていったものである。まずこの点を明らかにしたことは本書の大きな貢献である。

もう一つ、より大きいかもしれない貢献は、しばしば錯綜してきたサラリーマンと家庭との結びつきを様々な文化表象を使って丹念に検討し、いわゆる「マイホーム主義」という言葉では片づけられない部分を含めてその歴史的な発展を明らかにしたことにある。サラリーマンと家庭との関係は、しばしば核家族や性別分業のような言葉を使いながら、いささか図式的に理解されてきたように思われるが、この点についての歴史的な変化の過程を明らかにしたことは大きな意味を持つ。

他方で、いささか望みすぎという批判を覚悟しつつも、2点ほど評者がもう少し論じてほしかった点がある。

1点目は、結局のところ戦後のサラリーマンたちがなぜ「安定と平凡な家庭生活」を望んだ

のか、という点である。本書からは、戦前については、サラリーマンたちの成功が幸福な家庭を持つことに、正確に言えば幸福であるとみなされる家庭を持つことに結びついていたことが理解できる。しかし、一方で第6章の『江分利満氏の優雅な生活』の分析からは、このような価値観が虚構であることを戦後に生きる江分利は理解していたものとして描かれていること、そしておそらくそのような理解は戦争を経験したサラリーマンに共有されていたと思われることが明らかになる。そうであるとすれば、戦後のサラリーマンたちがそのような「規格化された」幸福が虚構であることを知りつつもそれを望んだ理由がもう少し説明されてもよかったように思う。著者自身が述べるようにそれは「『未来への投資』として子どもと家族に安定を与えるため」（25頁）かもしれないし、また「『敗戦』の記憶から遠ざかるため」かもしれない（同頁）。しかし、これだけではやはり十分な説明ではないように思われる。なぜ安定を求めたのか、なぜ家族が重要だったのか、このあたりはさらに一步踏み込んでみるのも良いように思われる。

この点は、会社と家庭との関係に対する捉え方にもつながってくる。本書で著者は「日本社会での安定とはサラリーマンの終身雇用制度によって保証されてきたわけではない」（26頁）と述べており、この主張そのものの正しさは本書で示されているとは思いますが、それでは日本の会社はサラリーマンの「家庭」や「安定」に対してどのように関わってきたのだろうか。第4章の源氏鶏太『三等重役』の分析が示しているように、家庭生活もまた会社に取り込まれているのだとすれば、単に終身雇用だけではなく、様々な形で会社が家庭のあり方に関わってきたのではないだろうか。この点につき、評者は戦前から会社は人々の生活に安定（著者の言う安

定と同じ意味であるかどうかは議論の余地があるものの)を作り出す存在であると捉えているが(清水 2021), そうであれば会社の役割は著者が示唆するよりももう少し大きいかもしれない。このあたりについては著者の更なる検討を期待したいところである。

2点目は、「サラリーマン」の今後についてである。著者は「いわゆる『終身雇用制度』と『年功序列』に象徴される『平凡なサラリーマン人生』というパラダイムの終焉に立ち会っている」(37頁)と述べ、人々に共有されたイメージとしてのサラリーマンが消滅しつつあること、そしてそのような消滅が「終身雇用」「年功序列」という言葉で代表されるような日本の雇用の仕組みの終焉に関わっていることを指摘する。しかし、実のところ、例えば神林龍が指摘するようにいわゆる終身雇用も年功序列も必ずしも全面的に崩れ去ったわけではなく、日本企業は雇用形態そのものを多様化させる一方で、とりわけコアとなる正社員(その多くは男性である)については従来の雇用形態を維持している(神林 2017)。もちろん、しばしば終身雇用の終わりが言われ、また昨今では「ジョブ型雇用」という言葉が流行するように、人々の意識の中ではいわゆる日本型の雇用の仕組みは終焉しつつあるのかもしれない。しかし、現実には日本の雇用の仕組みはそこまで変化しておらず、現代の「サラリーマン」たちは相変わ

らず会社に勤め続けている。むしろ、新型コロナウイルス感染症やロシア・ウクライナ戦争等により社会の不確実性が拡大している現在では、「サラリーマン」たちのように安定を求める生き方はむしろ拡大するかもしれない。本書のあとがきで「サラリーマンへの鎮魂歌」という言葉が使われるように、共通理解としてのサラリーマンという概念が終焉を迎えつつあるとしても、現実のサラリーマンたちは「どっこい生きてる」のである。このような状況を著者はどのように理解し、将来をどのように考えるのだろうか。

ただし、以上2点は今後の検討を期待するものであり、これらの点が本書の価値をいささかも減じるものではない。サラリーマンという生き方を歴史的に照らし出した本書は、我々が戦前から戦後の日本社会を考えようとする際に必ず読むべき一冊ではないかと思う。

(鈴木貴宇著『〈サラリーマン〉の文化史——あるいは「家族」と「安定」の近現代史』青弓社、2022年8月、471頁、定価4,000円+税)

(しみず・たかし 東京大学大学院総合文化研究科教授)

【参考文献】

- 神林龍(2017)『正規の世界・非正規の世界——現代日本労働経済学の基本問題』慶應義塾大学出版会
 清水剛(2021)『感染症と経営——戦前日本企業は「死の影」といかに向き合ったか』中央経済社